

アンドレ・マルローと 日本行動主義文学運動

堀 田 郷 弘

1

本稿は《アンドレ・マルローと日本》André Malraux et le Japon をテーマとする研究に属するものである。このテーマのうち、とりわけ日本においてどのようにマルローが受容されたか、を論点とする一連の研究の⁽¹⁾一編として、昭和9年(1934)半ばから昭和11年(1936)末にかけての文学運動である〈日本行動主義文学〉とマルローの関係を考察しようとするものである。

日本行動主義文学は、昭和9年小松清訳出によるラモン・フェルナンデス「ジイドへの公開状」(『改造』6月)、同じく同氏による「アンドレ・マルローと行動の文学」(『セルパン』7月)、「仏文学の一転機」(『行動』8月)を契機に、作家舟橋聖一が「文芸時評」(『新潮』9月)及び小説「ダイヴィング」(『行動』10月)で呼応したのが発端である。さらに青野季吉の「能動的精神の台頭について」(『行動』11月)によって文学論より思想的問題として拡大されるに至ったものである。

小松清の諸文は、ファシズムと戦争の危機に直面するフランスにおいて、作家を含めてのフランス知識階級が、コムニズムのヒューマニズムに希望を託し、自己への誠実、自己純化のため、労働者階級との連帯という行動の中に、現実社会参加と創作活動を行っているという紹介である。また舟橋は、日本プロレタリア文学の敗退に伴う“文芸復興”の思潮の中で苦悩する芸術派実作者

の立場で、小松によって紹介されたフランス文学者の動きをばねとして“復興”に参加し、とりわけ当時堀口大学によって訳出されたサンテグジュペリー『夜間飛行』*Vol de Nuit* にならって、いわゆる〈行動文学〉を創作しようとしたものである。青野はこの文学面での動きを、当時弾圧を経た後の進歩的知識人全体の、とりわけマルクス主義を中心とする社会的、政治的活動の沈下に対する再生の動きとして、従来の敗退の原因の分析を手掛りにすると共に、育成的に評価しようとしたものである。

これらの提唱を機に、その後雑誌『行動』⁽²⁾を中心に、『改造』、『新潮』、『文藝』、『セルパン』などの雑誌や、紀伊国屋出版部による『能動精神パンフレット』などの出版活動で、文学流派的活動を盛り上げている。人物的にも、小松、舟橋、青野をはじめ、豊田三郎、阿部知二、芹沢光治郎、森山啓、武田麟太郎、福田清人、窪川鶴次郎、貴司山治、新居格、植村鷹千代、矢崎弾、三木清、勝本精一郎ら、多くの文学者が参与している。とりわけこの文学運動を“反動”として全面否定するマルクス主義者大森義太郎、向坂逸郎、岡邦雄らの反対論⁽³⁾と、上記の人たちによる肯定論、あるいは育成ないしは警戒的批判論が論争をまきおこし、創作面よりむしろ、いわゆる1930年代一般の主要課題である“政治と文学”についての意義ある評論——小松清「行動主義理論」、舟橋聖一「文芸時評—意志と自由」「芸術派の能動性」、青野季吉「能動的精神の台頭について」、新居格「思想の前衛」、貴司山治「進歩的文学者の共働について」、三木清「行動的人間論について」、阿部知二「行動と知識人」など——あるいはフランスを中心とする新しい文学や文化の動向の優れた紹介——小松清「仏文学の一転機」、「超現実主義とその前夜」、「仏蘭西知識人階級の展望」、「仏文学の行動的ヒューマニズム」、高杉畑「アンドレ・マルローとラモン・フェルナンデス」や『世界文化』誌の〈世界文化情報〉の諸文、その他諸誌の〈国際文化擁護作家聯盟〉のメッセージ掲載や紹介、第一回全ソ作家会議に関する諸文など——を生み出した。しかし昭和10年9月その機関誌的な『行動』の廃刊が直接原因となり、また本質的には行動主義の理論および実践の不備、不作という内的原因から、急速にほとんど消滅に近い沈下をきたし、その後は

提唱者小松、舟橋と豊田らの同人による「行動主義文学作品の発達を図るための雑誌」『行動文学』に縮小され、最後はこの同人誌の廃刊（第6号、昭和11年6月）と共に消えた。

日本行動主義文学運動は、期間的にもわずか2年余り、しかも多くの問題を残しながらも線香花火のように燃えつくと同時に消え去ってしまった⁽⁵⁾（吉見）。しかし、この運動が提起した問題は大きなものであると思われる。それは、世界的な規模で“1930年代”，日本では中島健蔵の名付ける“昭和十年代”に、最も鮮明にあらわれた現代文学の大問題である“政治と文学”に他ならない。日本行動主義文学が範を求めたフランスにあっては、当時の反ファシズム運動から、第二次大戦中のレジスタンス運動、さらに戦後の“アンガージュマン”engagement（政治参加）へと常に文学の、知識人の中心的思潮として発展して行った。これにくらべると、日本のこの運動の不毛な姿は、提起された問題が大きなものだけに、異常なものを感じさせる。原因は当時から様々に指摘されたように“西欧文化受容”の姿勢に深く根ざすものと思われる。そもそもその名称である“行動主義”そのものが、小松はラモン・フェルナンデスの用語<行動のヒューマニズム>l'Humanisme de l'Action⁽⁶⁾を用い、フランスの現状から定義しようとしているが、当時すでに新村猛が指摘しているように、その実体には不明な部分が多い。フランスの<行動のヒューマニズム>は当のフランスに於いてさえ<主義>として明確化されていないもの、否、されえないような広義的なヒューマニズムの一形態であった。さらには、様々な思想的傾向を反ファシズムという名のもとに統合したフランスの知識人の行動の中でとりわけジイド、フェルナンデス、マルロー、サンテグジュペリーなど一部を範としてとりあげながら、その多様性の中のそれら作家の位置づけをしないままに、広義な“ヒューマニズム”という名称で包括してしまったことも、日本行動主義の出発点の曖昧さを思わせる。

本稿では日本行動主義文学の提唱者であり理論家である小松清を通じてほとんど中心的とも思える影響を与えたマルローを対象にして、彼がどのように受

容されているかを考察し、とりわけ明治以後常に日本文化の普遍的問題とされている“西欧文化受容”の一例を、当の日本行動主義文学運動とマルローとの関係に示したいと思う。

2

マルローがどのように日本行動主義文学運動に関係しているか、その内容的な考察に入る前に、現象的な面から捉えてみよう。

まず日本行動主義文学の発端となる昭和9年6月以前、マルローが日本文学にどのように関与しているかを簡単に述べてみたい。すでに、他の論文で詳しく述べたが、⁽⁸⁾マルローが初めて日本に紹介されたのは、昭和5年(1930)である。この年9月にマルローの小説『*Les Conquérants*』(1928)が、新居格訳によって『熱風——革命支那の小説』(東京、先進社)として出版されている。さらには昭和6年(1931)、マルローは、日本を訪れ、約2週間主に関西に滞在し、日本文化とりわけ美術を中心に接触を深めている。しかしこの翻訳も訪日も、日本の文学界に影響を与えた形跡はない。その後昭和9年6月までにマルローに言及しているものは、わずかに数点で、しかも佐藤朔、松尾邦之助などのフランス文壇紹介文の中の寸評の域を出ないものばかりである。

このように「マルローの上に沈黙の幕が執拗に覆れていた」⁽⁹⁾状態から日本文学が彼を発見しだすのは、まさしく日本行動主義運動が起ってからである。それは質量共に真の登場といえよう。次の表は、この文学運動の時期に当たる昭和9年～11年にかけてマルローに関しての邦文の著作である。

a) マルローの作品の翻訳

昭和9年(1934)：小松清訳『征服者』(改造社)；佐藤朔訳「1927年3月21日」(『中央公論』2月)。小松清訳「D. H. ローレンス論——チャタレー夫人の恋人について」(『文藝』8月)。稲田定雄訳「壮大なる英雄的叙事詩」(『文学案内』10月)。

昭和10年(1935)：小松清訳「《征服者》をめぐって—レフ・トロツキイとマルロオの論戦」, 「ルオウル論—絵画における悲劇的表現に就いて」(『翰林』1月), 「人間的条件」(『セルパン』2月)。石川湧訳「あらゆる人間が自己の生活を考えることを努力する」(『文学集団』2月)。

昭和11年(1936)：小松清訳『王道』, 『侮蔑の時代』(第一書房)。福永英二訳「侮蔑の時代」(『セルパン』4月)。山村房次訳「社会主義的リアリズムのために」(『セルパン』5月)。新庄嘉章訳「人間の条件」(『行動文学』7~9月)。小松清訳「人民戦線と作家」(『セルパン』9月)。内山敏「文化遺産の問題」(『文藝』11月)。

b) マルローに関する著作

昭和9年：小松清「ゴンクール賞の受賞者アンドレ・マルロオのこと」(『文藝』2月), 「アンドレ・マルロオと行動の文学」(『セルパン』7月)。伊吹武彦「孤独なる動乱——マルロオの小説『性命』について」(『文藝評論』2月)。高杉焔(新村猛)「アンドレ・マルロオとラモン・フェルナンデス」(『美・批評』10月)。

昭和10年：『翰林』新年号の「マルロオ研究・特輯」——中山省三郎「マルロオについて」, 大島博光「マルロオに於ける個我と集団」, 坂本義男「征服の人間と行動の文学」, 監月赴「意志と行動—レ・コンケランに就いて—」, 福田清人「《征服者》読後」, 阪本越郎「マルロオについて」, 十返一「レ・コンケラン」, 岩下明男「《征服者》断片」, 近藤浩一路「マルロオさんの第一印象」, 大野淳一「行動主義雑考」, 古谷綱武「小説としての《征服者》への不満—訳者小松清氏への手紙」, 「マルロオ著作年表」。伊藤鋭太郎「アンドレ・マルロオの空中偵察記—サバ女王市探険記録」(『行動』2月)。J. R. オウシュコルヌ「マルロオについて」(『翰林』2月)。I. エレンブルグ「アンドレ・マルロオと水夫」(『セルパン』4月)。菊岡久利「マルロオの思想——トロツキイとの論戦による片影」(『翰林』5月)。

昭和11年：小松清「アンドレ・マルロオへの手紙」(『新潮』2月)。池島重信, 福田清人, 檜崎勤, 徳田一穂, 舟橋聖一, 豊田三郎, 小松清「アンドレ

・マルローを語る座談会」(『行動文学』7月)。

c) 部分的にマルローに言及している評論については、行動主義に関する著述を中心に、反ファシズム運動あるいは全ソ作家大会など当時の時勢に関係する論述など多くに認められるので、主なもののみかかげておく。

小松清「仏文学の一転機」, 「クロワッセに托言して」, 「仏文学の行動的ヒューマニズム」(昭9), 「新しきジードの道」(昭10)。新村猛の『世界文化』各号の〈世界文化情報〉の諸文。新庄嘉章「見出されし影」, 「フランスの左翼作家の作品」, 『文芸案内』(昭11年2月)の座談会「ジイド, マルローを中心にフランス文壇の現状を語る」。その他左翼諸誌に掲載されたマルロー署名の「国際文化擁護作家連盟のメッセージ」など。

以上のように、マルロー受容は昭和9年を機に急激にふえる。外国作家で一時期にこれほど紹介、言及されたのは、当時の論議の中心が行動主義にあり、またその主義の中心にマルローがあったことに他ならないと思われる。このマルローの受容相の原因はさまざまに考えられようが、とりわけ小松清氏に負うところが大きいといわねばならない。

日本行動主義文学の提唱者であり、理論家の中心人物である小松清は、大正12年(1921)に絵画修業に渡仏し、滞仏中の1930年に当時N. R. F.の美術主任であったマルローの小説『征服者』に感動し面会したのがきっかけで、生涯の親交を結ぶことになった。昭和6年(1931)、文芸への関心をふかめた小松は、『新フランス評論』La Nouvelle Revue Françaiseの特派員として帰国し、その立場からジイドを中心としたN. R. F.や、それと連帯するフランスの新しい文学の動向を紹介した。それが日本行動主義文学の提唱となったのである。とりわけマルローに関しては、小松が最も傾倒する文学者として、先の文献表に示されているように、行動主義文学に関する著述に積極的に、中心的にとりあげている。

こうした小松の個人的心情のみがマルローと日本行動主義文学運動を密接にしたばかりでなく、その他マルロー自身の活動と、世界や日本の社会的文化的

状況がそれに寄与するところが大きい。昭和8年(1933)のゴンクール賞受賞作『*La Condition humaine*』による小説家マルローの世界的名声の確立、また当時の世界的反ファシズム運動の中で、ヨーロッパの中心的活動家の一人としてのマルローを、日本における反ファシズム運動をすすめる『世界文化』をはじめとする同じ立場にある誌紙、文筆家が積極的にとりあげたこと、さらに文学的に大きな事件であった第一回全ソ作家大会(1934年8月)でマルローがフランス代表の一人として活躍したことも、当時敗退から再建へと苦悩の中にあつた日本プロレタリア作家を中心とする進歩的文学者の注目せざるをえないところであつた。

3

次に日本行動主義運動におけるマルローのとらえ方について、とりわけ行動主義の根幹である〈行動〉を論点として考察をすすめてみよう。

日本行動主義文学運動において常に強調される場所は、文学者の“文学における行動性”と、“現実の行動”つまり“社会的実践”“社会参加”，という二つの〈行動〉の統合であると思われる。これは小松の提唱の著述の一つである「アンドレ・マルローと行動の文学」においても、その論述の骨子となっており、その思想と行動の一致の範としてマルローを論評する姿勢につらぬかれている。そこで、最初にマルローを例として、その“社会参加”の実体を調べ、日本の行動主義文学者のそれと比較してみよう。

次表は、当時の社会的事件とマルローの行動(右欄)との関連性を分かり易くするため、年代的に対照して列記したものである。

1933(昭8). [仏]. 1932年以来
右派 A. タルデュ政府において急進派と社会主義者提携. 世界大恐慌の波及. 内閣不安定. スタヴィスキー事件起こる(12月).

「反ファシスト世界委員会」, 「ユダヤ人排斥反対国際同盟」の指導者として参加(1月). 「革命的作家・芸術家協会」主催の反ファシスト大会で発言(3月, グラン・ドリアノン会館). メーデーの「反ファシズ

〔欧〕. 独でヒトラー政権樹立. 伊ファシズム全盛. 英の保護政策. 米ルーズベルトのニューディール政策. 西の共和勢力増大.

〔世〕. 日本と独の脱退により国際連盟の集団安全体制失敗. ソ連の第二次五ヵ年計画. 中国の共産党と国民党の抗日による合作.

1934 (昭9). 〔仏〕. 左右勢力の衝突激しくなる. 2月6日の議会襲撃に至る騒擾事件. 反ファシズム統一ゼネ・スト (2月). 共産党と社会党の統一戦線. 人民戦線運動.

〔欧〕. オーストリア独裁首相ドルフス暗殺. ユーゴスラビア王アレキサンドル一世暗殺. 伊・オーストリア・ハンガリー三国政治経済協定. 独ヒンデンブルグの死, ヒトラー総統就任. ソ連国際連盟加入.

〔世〕. 印ネール指導者. 中国共産党の大西遷. 排日宣言. 満州帝国成立. ワシントン・ロンドン両条約を日本破棄.

ム諸政党, 諸国体の立会演説会」で講演 (5月, ヴァンセースの森). 「反ファシストヨーロッパ会議」に出席 (6月, プレイエル). ロワイヤンに亡命中のトロッキーに面会 (9月). 亡命中のアインシュタインに援助.

『人間の条件』(1~6月) のゴンクール賞受賞 (12月). N. R. F 画廊で「フォートルィエ展」開催 (2月).

ジョドと共にベルリンへ行きデイミトロフ, テールマン釈放要求の抗議書を提出 (1月). 「デイミトロフとテールマン釈放世界委員会」結成し会長となる (1月). 「反ファシスト知識人監視委員会」に参加 (3月). ヒトラーの人民法廷に対抗するビュリエ講堂での大会に参加 (5月). 「テールマンの日」開催 (7月). テールマン釈放についての論告書「ゲッペルスへの回答」作成 (9月). 第一回全ソ作家大会に仏代表として参加 (8月). 「全ソ作家大会報告会」で報告 (10月, パリ相互会館). 左翼誌『ルーギャル』の編集委員.

シバ女王の遺都空中探検 (2月). 『人間の条件』の英, 伊, オランダ, スウェーデン訳.

1935 (昭10). [仏]. 仏・ソ相互援助条約(5月). 文化擁護作家大会. 人民連合成立(6月). コミンテルム7回大会により人民戦線綱領成立.

[欧]. 伊・エチオピア戦争勃発. 独ザール人民投票. 再軍備宣言. 米中立政策の法律化.

「革命的作家・芸術家協会」の本部「文化の家」の開館式に出席(3月). チューリッヒ亡命中のトーマス・マンの60才を祝い仏文学者の挨拶状に署名. 兵役年限延長法案抗議書に署名. 「文化擁護国際作家会議」の開催に努力, 6月パリ相互会館で開催, 司会, 報告をする. 事務局を常設し, 幹部会員及び仏書記局員に選出される. 「ソ連友の会」による「ソ連への友情週間大会」が開かれ, 名誉委員に選出される(6月, 相互会館). 人民連合戦線成立第一回デモに参加(7月). エチオピア戦争をめぐる右派知識人に反対する「ファッシスト知識人に対する回答書」に署名, また個人的にも「64人への反論」を発表. 「文化擁護国際作家協会」の第一回フランス支部大会で報告. エチオピア侵略反対の宣言書を読む(11月, 相互会館). 人民戦線の文化紙『ヴァンドルデイ』の創刊に協力(11月). 「フランス小説の擁護—『黒い血』についての会」の幹部会員として大会に出席, 講演(12月, ポワソニエール会館). 「テールマン委員会」で講演(12月, ヴァグナム会館).

新コムニズム小説『侮蔑の時代 *Le Temps du Mépris*』を発表. パリでネールと会見し非暴力運動について話合う.

1936 (昭11). [仏]. 労働総同盟

「ロマン・ロラン70才記念祝賀会」の委

員統合(3月). 総選挙で左翼勝利(5月). ブルム人民戦線政府成立(6月). ブルム政府のスペイン不干涉政策.

[欧]. 西・人民戦線派内閣成立(2月). フランコの反乱から内乱に突入(7月). 独軍ラインランド進駐. 伊によるエチオピア併合. 英もスペイン内乱に不干涉. ソ連の粛清, モスクワ裁判. ローマ・ベルリン枢軸. ギリシャ王制復活.

中国で抗日人民戦線結成.

員となり, 会の司会をする(1月). 「文化擁護国際作家会議」の第二回仏支部会に出席(3月). 「ソ連文化研究会」に出席(4月). 「民衆糾合委員会」の主催によるパリ・コミューヌ記念日60万人反ファシスト・デモに参加(5月). ロンドンの「文化擁護国際作家会議・書記局総会」に仏代表として出席, 講演(6月), 各国に規約とメッセージを送付. 「平和と自由のための国内集会」に出席(7月). 7月14日人民戦線派行列に参加. フランコ反乱の報と共に, 7月21日「戦争とファシズムに反対する知識人の世界委員会」の副委員長としてスペイン政府に連帯アピールを送る, さらに同委員会代表として24日秘かにスペインに渡る. 27日帰国し, ヴァグナム会館での集会に出席, 報告を行う. 9月国際義勇兵による航空隊エスパーニャを組織し, 指揮官となり, 共和派政府に参加, 65回の任務遂行. 戦乱のため第二回文化擁護国際作家大会のマドリード開催がむずかしくなったので, マドリード臨時会議(10月)で討議し, 改めて開催決議を表明.

1937年(昭12)には, 戦闘で負傷しパリにもどったが, 2月スペイン共和派のための資金集めに北米巡回講演を行い, アメリカ進歩派知識人との連帯を深める. 7月, 内乱のスペインで第二回文化擁護国際作家大会が開かれ, 参加, 講演を行い, 全世界の作家100名からなる統率委員会に選出される. 11月より

小説『希望, *L'Espoir*』を断片的なルポルタージュ形式で発表し、後に単行本として出版する。

1938年(昭13)には、共和政府の要請で、戦乱のスペインで映画『希望, *La bataille de Teruel*』を撮影する。

以上が、日本行動主義文学運動が範とした時期に当るマルローの“社会参加”の姿である。フランス・ファシズムに対する反対運動、反ナチズム運動、人民戦線結成への努力、全ソ作家大会への参加と親コムニズム実践、スペイン内乱での共和派義勇軍活動、それらさまざまなく行動における思想的根拠など内的な“質”の問題はともあれ、彼が当時のほとんどすべての重要な社会的、政治的事件に深く参加していることがわらう。こうしたマルローにみられる“社会参加”は、ひとりマルローのみのものではない。日本行動主義運動がとりあげた他のフランス作家にも、程度、様相の差はあれ認められるものである。例えば、舟橋が最初の行動文学小説として世に問うた『ダイヴィング』の霊源となった『夜間飛行』の作者サンテグジュペリーにしても、創作と並行して1933年(昭8)にはまだ先駆的であった航空の分野で飛行家として活躍しており、フランス航空界のため世界を講演巡回したりしている。1934年には、モスクワを訪れ、新生ソ連のルポルタージュを『パリ・ソワール』紙に発表したり、さらにスペイン内乱には新聞特派員として文筆で参加をしている。また第二次大戦中は、一時米国に亡命したが、帰国し、高齢にもかかわらず飛行士として参加、戦死している。また小松が最初にとりあげたジイドの例をみれば、ラモンの文にもあるように、書斎派から脱し、N. R. F.の総帥として、マルローの行動表にもみられるほとんど全ての反ファシズム運動に参加し、それは1936年の『ソヴェットより帰りて, *Retour d'U. R. S. S.*』のヒューマニズムにもとづく肅清批判から発する親コムニズム派からの転向まで続いている。

こうしたマルローをはじめとするいわゆる<行動派>の<行動>に対して、日本行動主義文学者はどのように<行動>を、“社会参加”をしたらう。

行動主義の最も特徴的な面は、書斎派的、青白きインテリ的な非行動性、非社会实践性への反対にあると思われる。舟橋が「自嘲と悲鳴」「生活苦渋の悲鳴文学」「混乞の嵐の中で、意志を喪失し、更に情熱をさえ懷疑する暗やみを彷徨していた」と表現し、小松が「⁽¹⁰⁾瞑想の個人主義」「無償的な瞑想、反省、⁽¹¹⁾審美」という非社会参加である。事実当時日本の文学者の“社会参加”の中心勢力たるべきプロレタリア文学派にも、昭和3年(1928)の共産党弾圧や治安維持法の強化から昭和6年の満州事件を経て、昭和8年2月の象徴的な小林多喜二の死、京大滝川事件、佐野と鍋山の転向など、敗退の歴史の果の沈滞の淵にあり、一方いわゆる芸術派もプロレタリア文学の全盛期の重圧からやっと顔をあげはじめたばかりの時であった。こうした状況にあった文学者の中で、世界の反ファシズム運動における他国の文学者たちの活動に対し、反応しようとした一つの典型が、日本行動主義文学者たちであった。しかし彼らの“現実行動”はどのようなものであったか。対ファシズムの状況がフランスと日本では異なるとはいえ、そこにはあまりにも大きな相違が認められる。舟橋や豊田、小松らが、当時日中戦争へと動く日本の諸事件に対し、どのように組織をつくり、どのように反対の実践をしたか。そこにはフランスのそれとくらべればほとんど皆無に等しい実体が浮び上ってくる。なるほど、行動主義作品と名をうたれた作品は『行動』10年6月号の「行動主義文学特輯」⁽¹²⁾をはじめ、数々創作されている。しかし実践の姿およびこれら作品群を見ると、そこにこそ日本行動主義のいわば非行動性があるように思われる。行動を創作面、文学理論の面に限りすぎた姿勢は、範としたフランスの作家たちにみるまでもなく、小松がくり返し指摘していた“全体性への指向”にもそぐわないものである。先述のフランス作家たちの作品は、マルローの『征服者』にしても、サンテグジュペリーの『夜間飛行』にしても、あえていえば、いわばその現実の行動から生まれて来たものである。作品そのものが行動から生みだされるという根本的特質、そして実践と思想の一致という大命題を抜きにした行動主義の空虚さはいうまでもなからう。日本の行動主義でも、様々な形で“文学者の参加”、“文学と生活実践の一致”の問題がとりあげられているが、実体は相変わらず“文学

者の実践は文学で”という旧態をこえられなかった。これが明確に示されるのは、後に現実の行動の選択を迫られた第二次世界大戦中の姿勢である。マルローはレジスタンスに、サンテグジュペリーは亡命、参戦、戦死という行動をとる。日本行動主義者は、沈黙、あるいは報道班員となる。状況の差は大きいにしろ、自己の価値を守るため、いや自己の価値づけをするため思想的に敵対すべきものへの戦いの行動であるレジスタンスと、いかに遠くへだたっているものであろう。

日本行動主義の限界がまさにここにある。瀬沼氏も次のように述べている「反ファシズム的行動の面は捨象され、専ら文学上の行動主義として、つまり能動精神として、文学の革命を作家の作品を通して行動に求めることになった。この結果、知識人の意識分裂を社会的行動から統一し解決するという⁽¹³⁾ことも、作品の内容の問題にとどまった」。

文学者の行動は文学創造にあるという日本行動主義文学者たちの考え方に則して、次に“作品”を通してフランスの作家と日本行動主義文学者とを比較考察してみよう。

4

作品として示された<行動>を分析するに、主としてその対象を日本行動主義文学運動で最もよく言及されているマルローの『征服者』、サンテグジュペリーの『夜間飛行』、そして日本の作品として舟橋聖一の『ダイヴィング』をとりあげてみよう。

日本行動主義の時期に紹介されたマルローの作品は、『征服者』(昭9—1933; 改造社; Les Conquérants 1928)と、『人間の条件』の抄訳、『王道』(昭11, 第一書房; La Voie royale 1930), 『侮蔑の時代』(昭11, 第一書房; Le Temps du Mépris 1934)である。なかでも『征服者』は小松清訳により、“行動主義文学の傑作”と宣伝され、この運動の最盛期に出版されたもので、最も言及された作品である。

『征服者』は、1925年の広東政府の第二次香港封鎖という歴史的事件を背景にして、6月25日から8月18日にいたる日付つきのルポルタージュ形式の構成で、スイスとロシアの混血ガリーヌ Garine という革命派の人物を主人公にして、動乱の中の人間と事件の交叉を描いたものである。

マルローがこの作品について「もしこの本が生き残るとするなら、それは中国革命の諸々のエピソードを描いたからではなく、行動への姿勢と、教養と、洞察力を一身に結合する主人公の一典型を示したからである⁽¹⁴⁾」と述べているように、主人公ガリーヌの行動と思索の中に全てが価値づけられていると思われる。ガリーヌは再起の危ぶまれる病に倒れるまで革命派の中心となって活動するが、その〈行動〉について彼は次のように述べている。

「おれの行動熱は、行動を離れたすべてのものに対して、おれを無気力にする、まずは行動の結果にしてもそうだ。おれがごく易々とこの革命に関係したのも、要するに革命の結果が出るのがほど遠いことであるし、それがたえず変化⁽¹⁵⁾しているからだ」。

「おれの行動熱がおれから逃げていく時、また行動と縁が切れる時、おれの血は⁽¹⁶⁾どんどん流れ出してしまう……」

その行動が革命の成果を期待しない以上、革命家ではありえないし、マルキストでもありえない。事実ガリーヌについて次のように説明されている。

「ガリーヌが信じるのは、ただエネルギーだけである。彼は反マルクス主義者ではないが、彼にとってはマルクス主義などいささかも“科学的社会主義”ではない。それは労働者の情熱を組織する一つの方法であり、労働者の中から⁽¹⁷⁾決死隊を集める一つの手段である」

ではこうしたガリーヌを革命活動へと、〈行動〉へとかりたてるものは何であらう。

ガリーヌはいう「ここでおれがやっていることは、人間の不条理との戦いだ⁽¹⁸⁾と思う」

「不条理の世界に生きるにせよ、他の世界に生きるにせよ…その世界の空しさ⁽¹⁹⁾にたいする確信と執念がなければ、力は湧かないし、その人生も味えない」

「人生など少しも価値がない、しかし人生に値いするものは何もない」⁽²⁰⁾

「この根ぶかい不条理感こそ、彼の力の源泉であることが、私にもわかって
いた。もし世界が不条理でないとなれば、彼ガリーヌの生きる全てが消滅して
しまう」⁽²¹⁾

ガリーヌの〈行動〉の意味は、〈世界の不条理〉という感覚、確信、それへの反抗である。こうした主人公の不条理感、作者マルロー自身が、それまでの著作でくり返し述べ、自己の主要課題として来たことである。後のサルトル、カミュによって広く思想として人々の心をとらまえることになるあの“アプシュールディテ absurdité”である。マルローが人物の行動に与えた意味は、こうした存在論的な、形而上的な人間の生の意味を無に帰してしまう絶望の土壌から来る反抗のエネルギーである。次作は、この主題が表題となって『人間の条件』の名で真正面からとりくまれている。

サンテグジュペリーの『夜間飛行』についても、マルローと同じ世代で同じ精神の土壌にあることがわかる。暴風と立ち向う航空士、それは厳然として存在する強力な世界の不条理とそれにあくまで反抗の姿勢をとりつづける人間の闘いの図式である。

舟橋氏も、この小説に「人間の生命に立ち優るものがあるかのように行為する」作中人物の意志を讃美し、自からを含めての「わが国のモダーニズム文学が、甚しくこうした意志の力を欠いていること」⁽²²⁾を反省し、小説『ダイビング』を書き上げている。

小説『ダイビング』が十全にその行動思想を文学的に表現出来たものではないと自からことわっているものの、その意図ははっきりしている。

主人公の休筆中の作家龍二は心ならずも父の会社の再建の仕事をしているが、彼をとりまく「筒のようなサラリーマン生活の中に閉塞している長太郎、ヒステリーなる母、混迷と自家撞着的でしかない重役会議、津乃木家の空なる家名意識、さうしたあらゆる個人主義的な儼から」⁽²³⁾妻沙代のはげましに力をえて、思いきって脱皮し、立上る。こうした筋立てに、当時の不穏な諸事件がはさまれている作品である。

ここに中心的に描かれる主人公のダイヴィングのような思いきった<行動>の性質を考えてみよう。この主人公の行動に対し作者は次のように書いている。「押えても押えても、掘起してくる素質の内部的進化が、外部現実の圧制をつき崩そうとしている。仕事の責任者としての意思は無惨にも蹂躪されるが、ぼくをもっと有能に生かすための純粋な努力、そしてその道へ突入するための傍目もふらぬ勇氣は、それがどんな平凡な人間の場合でも、意識の上昇を示す、人間の美しい姿勢である⁽²⁴⁾」。

表現はむつかしいが、筋立てからすれば、主人公個人の中に認められる小説に本当にうちこみたいという欲求によって、生活の枠を打ちやぶるという行為に他ならない。

マルローにしる、サンテグジュペリーにしる個人的な作中人物の行為は、単に個人にとどまらない人間一般の、しかも人間存在のあり方を問う質疑から来る一つの問答としての意味づけが認められた。しかし、龍二なる人物の最後の行動の中に果してそのように根源的で深化されたものがあるだろうか。日本行動主義者の藤森成吉の「行動主義的作品批判」(『文芸』昭和10年4月)におけるマルローの『征服者』理解など優れた評論も見うけられるが、実作においては、行動的なフランスの作家たちの<行動>の真の意味を十分に消化、理解しているような例証は少ない。ほとんどが、時事的な粉飾をした生活次元の、個人的限界の<行動>であり、フランス作家のそれと対比するとその皮相性を際立たせるばかりである。

5.

日本行動主義文学運動に対してマルローが大きな影響を与えたことは否定できないことである。行動主義がフランスの新しい文学動向、一ラモン・フェルナンデスの<行動のヒューマニズム> *l' Humanisme de l' Action* という言葉で小松氏が集約した思潮^一を範として起ったこと、その提唱者であり主要な理論家である小松氏が最も傾倒していた作家が友人でもあるマルローであったこと、反ファシズムを一つの支柱とした行動主義に対して、マルローの様々

な反ファシズム活動の影響、中国革命を背景とした『征服者』の翻訳をはじめとする多数のマルロー論評など、その理由はいくつもあげられよう。ジイドと並んで中心的な影響を与えた作家といっても過言ではない。

しかし受容の様相をみると、そこにはマルロー及びマルロー文学の実体とは大きな差異がみられる。一つは、作品における行動についてであるが、マルローの人物たちにみられる形而上的な「不条理感」、それをばねとしたような根源的絶望から来る反抗の姿勢が見落されている。戦後のサルトル・カミュに先がけて感情的に感覚的にとらえていたマルローのこの「世界の不条理性」「人間の悲劇的条件」は、戦後の日本文学でしか真の姿を受容できなかったものである。また他の一つは、現実の行動、つまり“社会参加”というべきく行動>である。当時のマルローの社会、政治参加は、当時の多くのフランス作家あるいは大きくは1930年代の欧米の作家のほとんどにみられる反ファシズムの実践であった。状況は日本でも同じであったが、わが国では行動主義文学者よりむしろ『世界文化』など左翼知識人による“社会参加”が中心であったといわねばならない。

とりわけ、現実行動の欠除は、日本行動主義文学の不毛さと短命を決定づけるものと思われる。フランスの行動的作家たちが、その文学を成立させるためにこそ、“社会参加”を積極的に行い、思想と実践の統一、人間としての全体性の回復に努めていたことを知るとき、日本行動主義文学者が文学作品の創造を通してのみ<行動主義>たらんとしたことは、極言すれば、フランスの行動派といわれる作家たちが真の問題としたところを避けてしまったといわざるをえない。

フランスにおける戦時中のレジスタンス運動、戦後の“アンガージュマン”，また日本においても戦後の文学者の社会、政治面での活動を見るにつけ、当時の行動主義文学者の限界が、この創作と社会参加のあるいは思想と行動の統一への努力が欠けていたところにあったことがよくわかる。

(1976. 9. 10)

参考文献

1. André Malraux : Romans-Les Conquistadors, La Condition humaine, L'Espoir (Gallimard, 1947)
 2. Lefranc : Histoire du Front Populaire (Payot, 1965)
 3. 海原峻「フランス現代史」(平凡社, 昭49)
 4. 臼井吉見「近代文学論争, 下」(筑摩書房, 1975)
 5. 平野謙「文学・昭和十年前後」(文芸春秋社, 昭49) — 「行動主義文学論」(「文学界」昭37.7)
 6. 小松清「行動主義文学論」(紀伊国屋出版部, 昭10)
- その他, 文中の引用の文献と2章におけるマルローに関する諸文献など。

註

- (1) 「日本におけるアンドレ・マルロー受容—1941年(昭6)まで」(「城西大学開学十周年記念論文集」1975.11), 「アンドレ・マルローの最初の日本訪問(1931年)について—前編」(「佛蘭西文藝」1号, 1976)などの拙文を参照されたい。
- (2) 紀伊国屋出版部から昭和8年10月月刊文芸誌として創刊され, 昭和9年10月から総合雑誌となり, このころより行動主義文学の機関誌的な色彩をもつようになった。
- (3) 大森「続現代知識階級論」(『行動』昭10.1), 「いはゆる行動主義の迷妄」(『文藝』昭10.2), 「小松君の公開状に対して」(『行動』昭10.4); 岡邦雄「各人各様の物言ひ」(『新潮』昭10.3), 「行動主義者の末路」(『文藝』昭10.11); 「新動向対談会—大森, 向坂, 窪川, 小松, 舟橋, 田辺」(『行動』昭10.4) etc.
- (4) 『行動文学』昭11年6月創刊号の舟橋聖一「巻頭言」。
- (5) 文献4
- (6) 小松清「仏文学の行動的ヒューマニズム」(『セルパン』昭9.10), 及び「行動主義理論」(『行動』昭10.1)
- (7) 関口の名で「フェルナンデス・行動主義・作家聯盟」(『世界文化』1935.5)
- (8) 註(1)の論文参照されたい。
- (9) 小松清「アンドレ・マルローと行動の文学」(『セルパン』昭9.7). p.22.
- (10) 舟橋「文芸時評」(『新潮』昭9.9)
- (11) 小松「仏文学の一転機」(『行動』昭9.8)
- (12) 阿部知二「貴族」, 芹沢光治良「選手」, 福田清人「河岸」, 舟橋聖一「濃淡」, 武田麟太郎「臨時列車」
- (13) 「日本文学大辞典, 8」(新潮社, 昭49), p.91.
- (14) 文献1, p.163. Mais ce livre n'appartient que bien superficiellement à l'Histoire. S'il a surnagé, ce n'est pas pour avoir peint tels épisodes de la révolution chinoise, c'est pour avoir montré un type de héros en qui s'unissent l'aptitude à l'action, la

culture et la lucidité.

- (15) 文献1の Les Conquérants. p. 143. Mon action me rend aboulique à l'égard de tout ce qui n'est pas elle, à commencer par ses résultats. Si je me suis lié si facilement à la Révolution, c'est que ses résultats sont lointains et toujours en changement.
- (16) 註(15)と同書, p. 143. Quand mon action se retire de moi, quand je commence à m'en séparer, c'est aussi du sang qui s'en va...
- (17) 註(15)と同書, p. 148. Garine ne corit qu' à l'énergie. Il n'est pas anti-marxiste, mais le marxisme n'est nullement pour lui un "socialisme scientifique"; c'est une méthode d'organisation des passions ouvrières, un moyen de recruter chez les ouvriers des troupes de choc.
- (18) 註(15)と同書, p. 114. Il me semble que je lutte contre l'absurde humain, en faisant ce que je fais ici...
- (19) 註(15)と同書, p. 152. Vivre dans un monde absurde ou vivre dans un autre... Pas de force, même pas de *vraie vie* sans la certitude, sans la hantise de la vanité du monde
- (20) 註(15)と同書, p. 143. J'ai appris aussi qu'une vie ne vaut rien, mais que rien ne vaut une vie.....
- (21) 註(15)と同書, p. 152. Je sais.....que c'est de cette sensation profonde d'absurdité qu'il tire sa force: si le monde n'est pas absurde, c'est toute sa vie qui se disperse en gestes vains.
- (22) 「文芸時評」(『新潮』昭9.9)
- (23) 舟橋聖一「ダイヴィング」(『行動』昭9.10), p. 343.
- (24) 註(23)と同書, p. 343.